

富山県 福岡町

石名田木舟遺跡 発掘調査報告書

—県指定史跡 木舟城跡隣接地における発掘調査—

1997年3月

福岡町教育委員会



平成 8 年度 石名田木舟遺跡 調査地全景（西から）

序

福岡町は、富山県の北西部に位置します。町の東と南には砺波平野が広がり西の丘陵地帯は宝達山を主峰として能登半島に連なり石川県と接しています。また、当地は古くから交通の要衝であったことから砺波平野支配の拠点として歴史に名を残しております。

当町を西から北へと横切る丘陵には、多くの古墳が存在しており、その中には県指定の史跡である城ヶ平横穴古墳群も含まれております。この古墳は古墳時代終末期（六世紀末～七世紀初頭）のもので、現在、東京国立博物館に収蔵されている「銀象嵌頭椎柄頭」はここで出土したものです。

近年、開発による発掘調査は増加の一途を辿っており、数多くの発見も開発に伴う緊急発掘調査によるものであり、言いかえると、それだけ多くの遺跡が姿を消しているともいえます。私達の地域の歴史を知ることは同時に郷土への関心と愛着を深めることになりますが、一度発掘したものは二度と元に戻らないという事実も併せて考え、細心の注意と配慮をもってその姿を明らかにする必要があります。こうした意味で、私達の郷土の文化を探り、後世に残すことは現代に生きる我々の責務であると考えます。

石名田木舟遺跡は、能越自動車道の建設による分布調査によって遺跡の存在が認められたもので、その範囲は隣接する小矢部市にまたがるものであります。今回の調査地の約1km北において平成6年度に行われた調査では、飛鳥様式の円崩し高欄を巡らした瓦塔が出土し注目されました。そして今回、石名田木舟遺跡内に位置する県指定史跡木舟城跡周辺の町道の歩道設置工事と、道路改良工事が計画されたため、記録保存調査をおこなうことになりました。

今回の調査で確認された堀跡は、1586年の天正大地震によって崩壊した木舟城のものであり、その規模が具体的に判明しなかった城の範囲を確定する手掛かりになるものであります。この報告書が、この地域の歴史を知るだけに止まらず、これを契機に埋蔵文化財に対する人々の理解が深まり、また保護意識の高揚につながるよう期待しております。

終わりに、調査にご援助、ご協力を頂きました地元の方々及び、富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の方々に厚く御礼申し上げます。

平成9年3月

福岡町教育委員会

教育長 谷崎嘉悦

例　　言

1. 本書は福岡町教育委員会が平成8年度に実施した石名田木舟遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、福岡町木舟地内の町道大滝正得線歩道設置工事と町道矢部石名田線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査として福岡町建設課の依頼により、福岡町教育委員会が調査主体となり実施した。また、現地調査にあたって富山県埋蔵文化財センターから調査指導を受けた。
3. 調査事務所は福岡町教育委員会社会教育課に置き、文化財保護主事栗山雅夫が調査事務を担当し、社会教育課長藤森壽が総括した。
4. 調査期間・面積・担当者は次のとおりである。

調査期間

A地区（町道大滝正得線） 平成8年9月24日～10月24日

B地区（町道矢部石名田線） 平成8年10月14日～11月29日

調査面積

A地区 240m²

B地区 210m²

担当者 福岡町教育委員会 文化財保護主事 栗山雅夫

富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事 越前慶祐

5. 資料の整理、本書の編集と執筆は、富山県埋蔵文化財センター職員の協力を得て、調査担当者がこれにあたった。

6. 調査期間中および資料整理期間中、次の方々から御協力を頂いた。記して謝意を表したい。

安念幹倫・池野正男・岸本雅敏・小島俊彰・高岡徹・高梨清志・西井龍儀・宮田進一・山本忠尚・
木舟城跡調査検討委員会（五十音順・敬称略）

7. 出土品および記録資料は、福岡町教育委員会が保管している。

8. 図版類の縮尺は、図版下に示した。方位は真北を、水平基準は海拔高を用いた。

9. 遺構の標記は次の記号を用いた。

溝：SD 土坑：SK ピット：SP その他：SX

10. 本書の土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著 1967『新版標準土色帖』(株)日本色研事業に準拠している。

11. 遺物整理作業は栗山が担当し、次の諸氏の協力を得た。

平野哲史・高田優子

また、現地調査にあたっては社団法人福岡町シルバー人材センターの協力を得た。

目 次

I 遺跡の位置と環境	1	図版 1 1958年当時の石名田木舟遺跡
第1図 位置と周辺の遺跡	1	図版 2 A地区全景写真
II 調査の経緯と経過	2	図版 3 A地区北部ブロック写真
第2図 調査位置図	2	図版 4 A地区垣跡
第3図 調査区割図	3	図版 5 A地区遺構
III 調査の結果	4	図版 6 B地区全景写真
1. 基本層序	4	図版 7 B地区遺構(1)
2. 遺構	4	図版 8 B地区遺構(2)
第4図 A地区遺構	6	図版 9 出土遺物（中世土師器）
第5図 A地区遺構全体図	7	図版10 出土遺物（中世土師器）
第6図 B地区遺構全体図	9	図版11 出土遺物（中世土師器）
3. 遺物	11	図版12 出土遺物（土器）
第7図 出土遺物実測図	14	図版13 出土遺物（土器）
第8図 出土遺物実測図	15	図版14 出土遺物（漆器椀）
第9図 出土遺物実測図	16	図版15 出土遺物（漆器椀他）
第10図 出土遺物実測図	17	図版16 出土遺物（木製品・金属製品・石製品）
IV まとめ	18	報告書抄録
第11図 出出土器の組成（中世）	18	
第12図 中世土師器分類表	19	
参考文献	20	

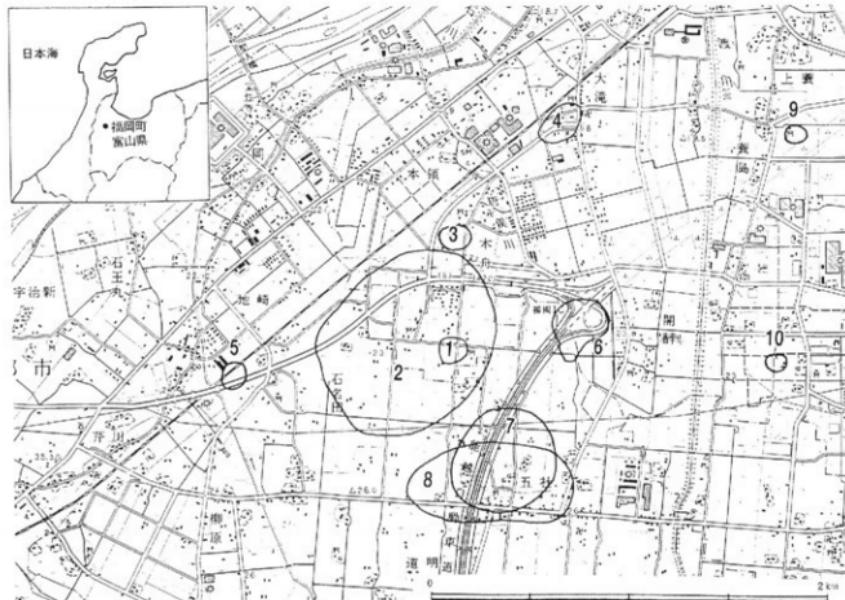
I 遺跡の位置と環境（第1図）

当遺跡は、富山県西砺波郡福岡町木舟地内と同県小矢部市石名田地内にまたがって所在している。

福岡町は富山県の西部に位置し、東側の平野部は小矢部川と庄川によって形成された複合扇状地で、砺波平野の北西端部に位置している。また、西側は、宝達山に続く丘陵地で町の総面積の4分の3を占める。

町内の遺跡をおおまかにわけると、町西侧の丘陵部に旧石器～縄文時代後期の遺跡が点在し、平野部には縄文時代晩期から近世に至る遺跡が広がる。なお、平野部を望む丘陵部には古墳時代後期を主とする古墳群や中世の山城が点在している。また、古代の北陸道は丘陵の山裾を通っており、高岡市伏木にあった国府に通じていたとされている。丘陵部の主な遺跡には、上野A遺跡（縄文時代前期・中期・古墳時代）、下向田古墳（古墳時代）、城ヶ平横穴墓群（古墳時代後期）、鶴城跡（中世）などがある。また平野部の主な遺跡には、下老子笛川遺跡（縄文時代晩期・弥生時代・古墳時代・古代～近世）、江尻遺跡（古墳時代・中世～近世）がある。

石名田木舟遺跡は小矢部川右岸の平野部に位置する弥生時代・古代～近世にかけての遺跡である。当遺跡は平成5年に能越自動車道の建設に伴う調査がおこなわれたのを皮切りにして、これまで計3回調査されている。弥生時代に関する遺構は確認されていないが、古代については8～9世紀を中心とする集落遺跡であったと考えられており、7世紀後半から8世紀初のものと考えられる瓦塔と阿弥陀三尊像も出土している。¹⁾また、中世では16世紀中頃の礎石建物がみつかっており、1586年の天正地震で埋没した木舟城の城下町であったことが判明している。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 木舟城跡
2. 石名田木舟遺跡
3. 木舟北遺跡
4. 大湊遺跡
5. 地崎遺跡
6. 開経大湊遺跡
7. 五社遺跡
8. 五社集町五社遺跡
9. 糸島遺跡
10. 矢部冲野田遺跡

II 調査の経緯と経過（第2図）

今回調査をおこなった石名田木舟遺跡は、能越自動車道の建設を契機として発見されたものである。

調査原因は町道大滝正得線の特定交通安全施設整備事業と町道矢部石名田線の道路改良事業が、能越自動車道建設に伴う地元の環境整備のため計画されたことによる。これを受け平成6年に富山県埋蔵文化財センター（以下、埋文センターと略す）、福岡町教育委員会、福岡町都市計画課、福岡町建設課との間で協議が行われ、試掘調査を行うこととなった。

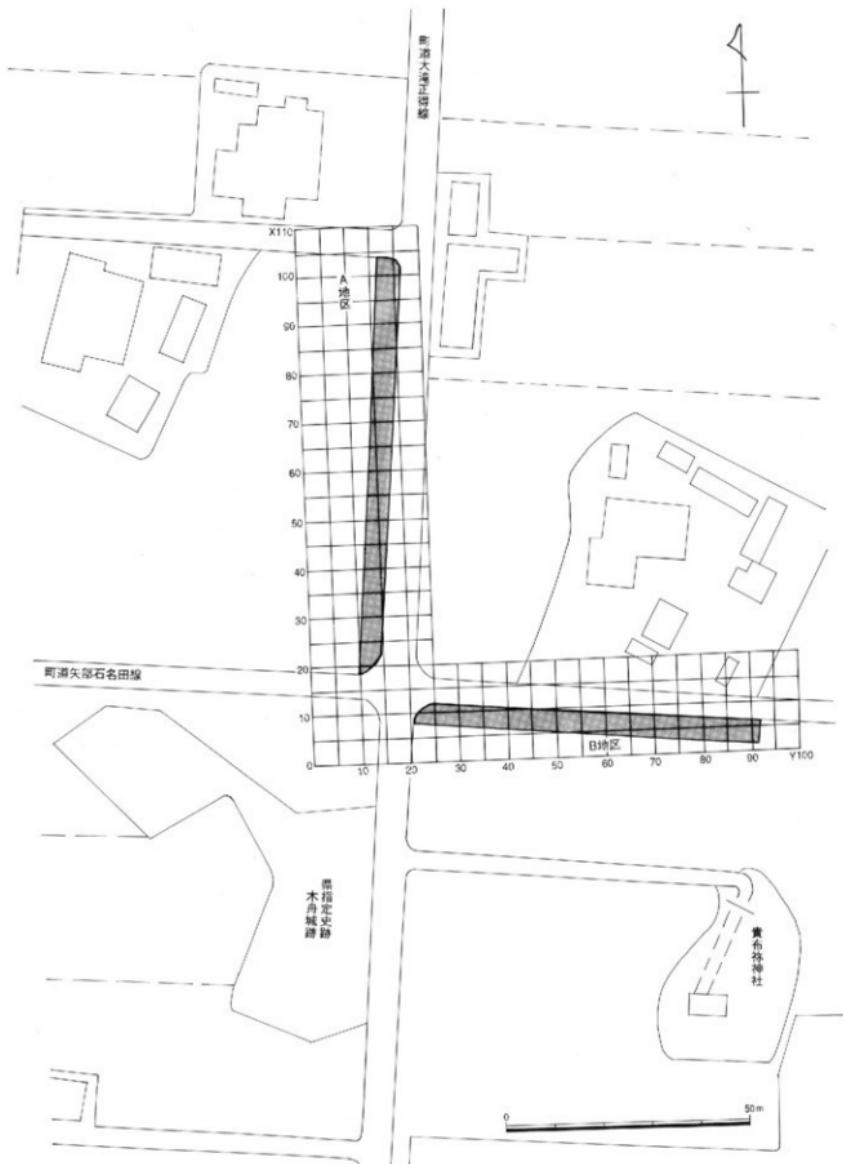
町道大滝正得線の試掘調査は平成6年12月に埋文センターによって行われている。その結果、A地区で掘跡と思われる遺構、さらにC地区で中世後期のものと思われる遺構が検出され、この2カ所で記録保存調査が必要なことが判明した。このうち、C地区の記録保存調査は同年中に行われている。ここからは、時期のわかる遺物の出土なかったが、井戸2基、柱穴12基、土坑5基、溝1条と噴砂が検出され、中世末と時期を大きく違えるものではないと判断されている。一方、町道矢部石名田線の試掘調査は平成6年11月に、小矢部市に依頼して行われた。その結果、D地区で掘跡と柱穴が検出されたことから、この部分の記録保存調査が必要であることがわかった。その後、平成7年3月

には埋文センターによってD地区的記録保存調査が行われている。試掘調査及び記録保存調査によって、遺物包含層、掘跡から12世紀後半～16世紀後半までの遺物が出土し、調査地付近の中心年代は珠洲、越前の年代から15世紀後半～16世紀後半までであるとされた。また、平成8年に協議を行いA地区とB地区的記録保存調査を行うことにした。以上の経過を経て、今回の調査を実施するに至った。

調査はまず、試掘調査の結果をもとに重機による表土除去をおこない、その後、国家座標に合わせて5m間隔で基準杭の設定を行い1m×1mを1区画とした。A地区的X70Y15は国家座標の+76150-22295で、B地区的X5.5Y70は国家座標の+76090-22240である。その後、人力による遺構の検出と掘削をするとともに図化、記録作業を行った。それぞれの遺構については調査員が記録を取ったが、遺構平面図については航空測量を行った。



第2図 調査位置図 (1/5,000)



第3図 調査区割図

III 調査の結果

1 地形と層序

調査地を含む木舟地域は昭和47年に圃場整備を受けており、町道大滝正得線と町道矢部石名田線はこのとき作られたものである。また、木舟川（前川）は、A地区の北で町道大滝正得線と重なるようにして流れていたことが試掘調査により判明している。現在、木舟一帯は圃場整備によって平坦な水田地帯となっているが、地元の人の話によると圃場整備以前の地形と現況の地形では大きく異なり、現在県指定史跡となっている木舟城跡は南北に延びる微高地上に位置し、その東西とはかなりの高低差があったといわれている。さらに、貴布祢神社の周辺では湧水があり、この湧水が木舟川の水源の一つになっていたそうである。こうした地理的条件のため、圃場整備が行われるまで一帯は沼田の様相を呈していたそうである。この様子は、1799年に記された『加越能三州志』にもみられ、木舟城は「四辺深沼」であったと記録されている。今回調査を行ったB地区はちょうどこの深沼だった場所に位置し、A地区は微高地上に位置していることになる。

A地区の基本層序は過去の調査結果から考えて、上から順に、1層：灰オリーブ色砂質シルト、2層：灰オリーブ色シルト、3層：オリーブ色シルト、4層：黒色粘質土、5層オリーブ黒色シルト、6層：灰オリーブ色砂土、7層：暗オリーブ褐色砂礫である。このうち、2層上面が16世紀代の中世遺構確認面、4層が中世前期の遺物包含層、5層が中世前期の遺構確認面と古代の包含層、6層が古代の遺構確認面となっている。ただし、今回の調査では中世前期と古代の遺構は確認されなかった。また、この基本層序が残っていたのは道路脇の排水路部分の下だけであり、水田部は表土直下が5層になり、これより上の層は削平を受けている。

B地区の基本層序は上から順に、1層：褐色砂質シルト、2層：灰色シルト質砂土、2-II層：灰色粘質土、3層：黒褐色シルト、3-II層：黒褐色砂質シルト、4層：灰色砂土、5層：褐灰色粘土、6層：暗褐色粘土である。このうち、3+3-II層は中世包含層である。遺物は大半が3-II層に含まれており15世紀後半～16世紀のものが中心である。この時期は木舟城が最も栄えていた頃にあたる。噴砂は3-II層まで上がっているものと2-II層まで上がっているものがある。前者は木舟城を崩壊させたと伝えられる1586年の天正地震によるものと考えられ、後者は1858年の飛越地震によるものと考えられる。特に前者の噴砂は3-II層上面に厚さ10cm程度の砂層が堆積しており、地層が1枚増えたのかと錯覚するほどの広がりを持つものであった。

2 遺構

(1) A地区の遺構

(a) 北側ピット群

北側ピット群のうちで建物を構成する可能性のあるものはS P01、S P05、S P06、S P16、S P32、S P34、S P35、S P39、S P44、S K01、S K02等がある。このうち、S K01は直徑20cm程度の根石を持ち、根石の上部には柱根のものと思われる樹皮が残っていた。また、S P01、S P05、S P06、S P16、S P32、S P34、S P35は明確な柱根痕跡を持ち、S P01、S P06の履土は木舟を含んでいた。断面で確認できたS P39、S P44は直徑、深さともに1m以上あり、楕円柱穴と呼ばれるものである。他のピットも同様の形態と規模をもつと思われるが、削平を受けているため直徑が30cm、深さが20cm程度の小さくて浅いものが多い。

掘跡を除くと遺構に伴う遺物の出土はほとんどなかった。遺物が出土したのは、S P19内の古代の土師器甕とS P44内出土の中世の石臼、S K02内出土の柄杓の身の部分である。

(b) 堀

表上面下からの深さが最大で80cm、幅約13mの東西方向に巡る掘跡が検出された。断面形は南側約5mがU字形を呈し、その北側ではこれより1段高くなつて幅8m深さ40cmのテラスを設けていた。ただし、2層以上は削平を受けていることから、本来の堀の大きさは今回検出したよりも幅が広くて深かったものと思われる。堀の埋土からは上質土器、漆器碗と長さ1m程の建築部材が出土した。また、堀の南端では堀の内側にズリ落ちた土塁の痕跡を確認した。この土塁は粘質土とシルトによる互層を成していて、版築したような形状をしている。この上塁は天正地震によって崩れたものと思われる。地震の後、堀は浚渫されることなく除々に埋まっていったようである。

(c) 南側落ち込み

A地区のX33Y12.5付近以南では7層の砂礫層が次第に深くなり、調査区の南端では50cm程落ち込む。この場所の深さは1.3mにもなり調査区外はもっと深くなる。この落ち込みが堀の役割を担っていた可能性が考えられるが、この付近の削平はかなりひどく、部分的に4層だけがのこっているという状態であったため掘込み面は不明である。

(2) B地Xの遺構

(a) 西側落ち込み

X10.5Y17付近から木舟城側に向かって落ち込みがある。この落ち込みはA地区南側の落ち込みと対応していることが予想されたことから部分的に深掘を行った。ところが、現況水田面からの深さが2m近くに達してもなお砂礫層は検出できず、壁面が崩れる可能性もあったのでそこで深掘をストップした。この落ち込みについても掘込み面ははっきりせず、A地区的落ち込みと対応しているかどうかわからなかった。この部分の堆積状況は砂と粘質土の互層をなしていた。なお、この地点では長さが1m、幅が30cm、厚さが8cmの板材と、一回り小さい板材が組み合うようにして地面に突き立って出土した。また、地元の人の話によると、圃場整備がおこなわれる以前には雪が積もると木舟城からスキーをして遊んだほど高低差があったとのことである。

(b) SD 02

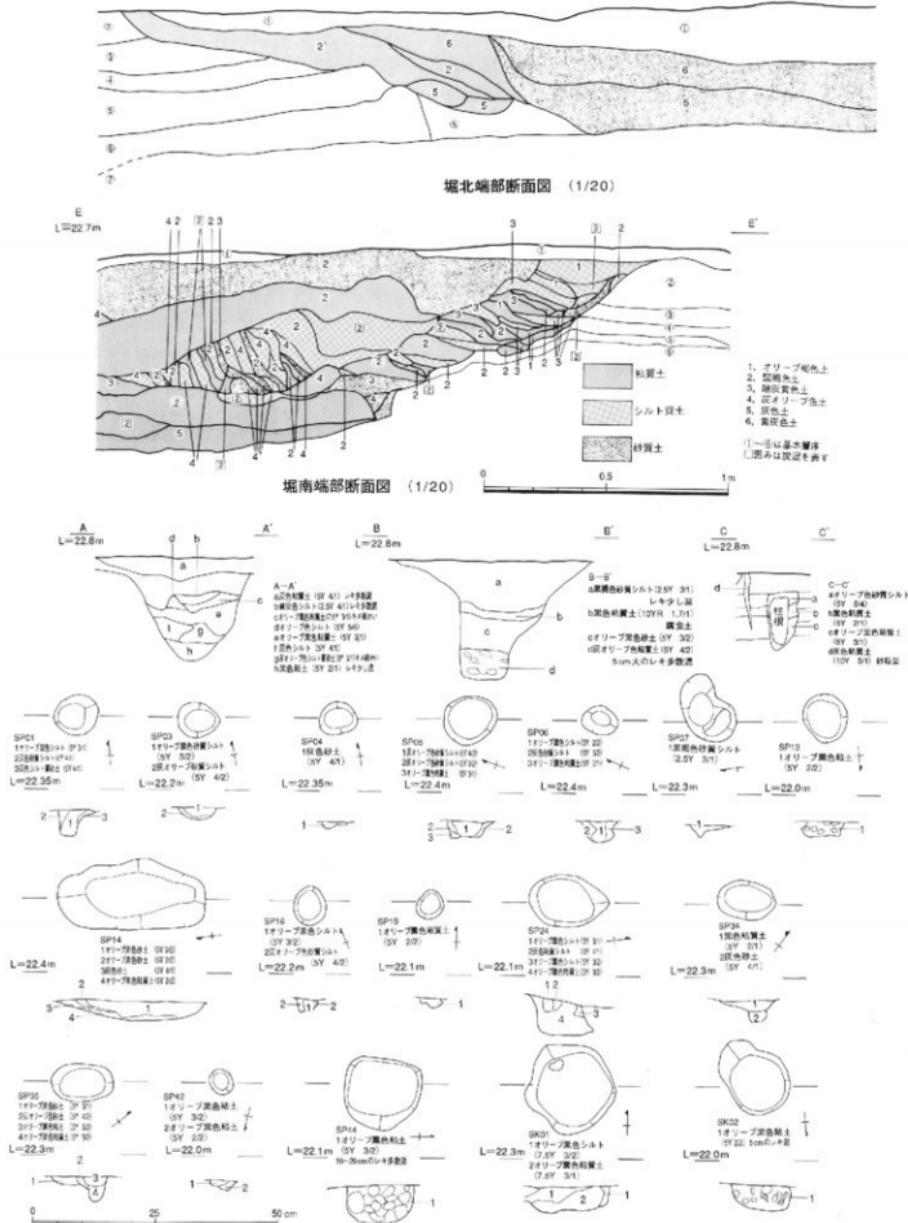
調査区を北西から南東に横切る形で検出された溝で、幅約3m、4層からの深さが約50cmである。このSD 02周辺では中世土師器、漆器が多く出土している。

(c) 柱穴

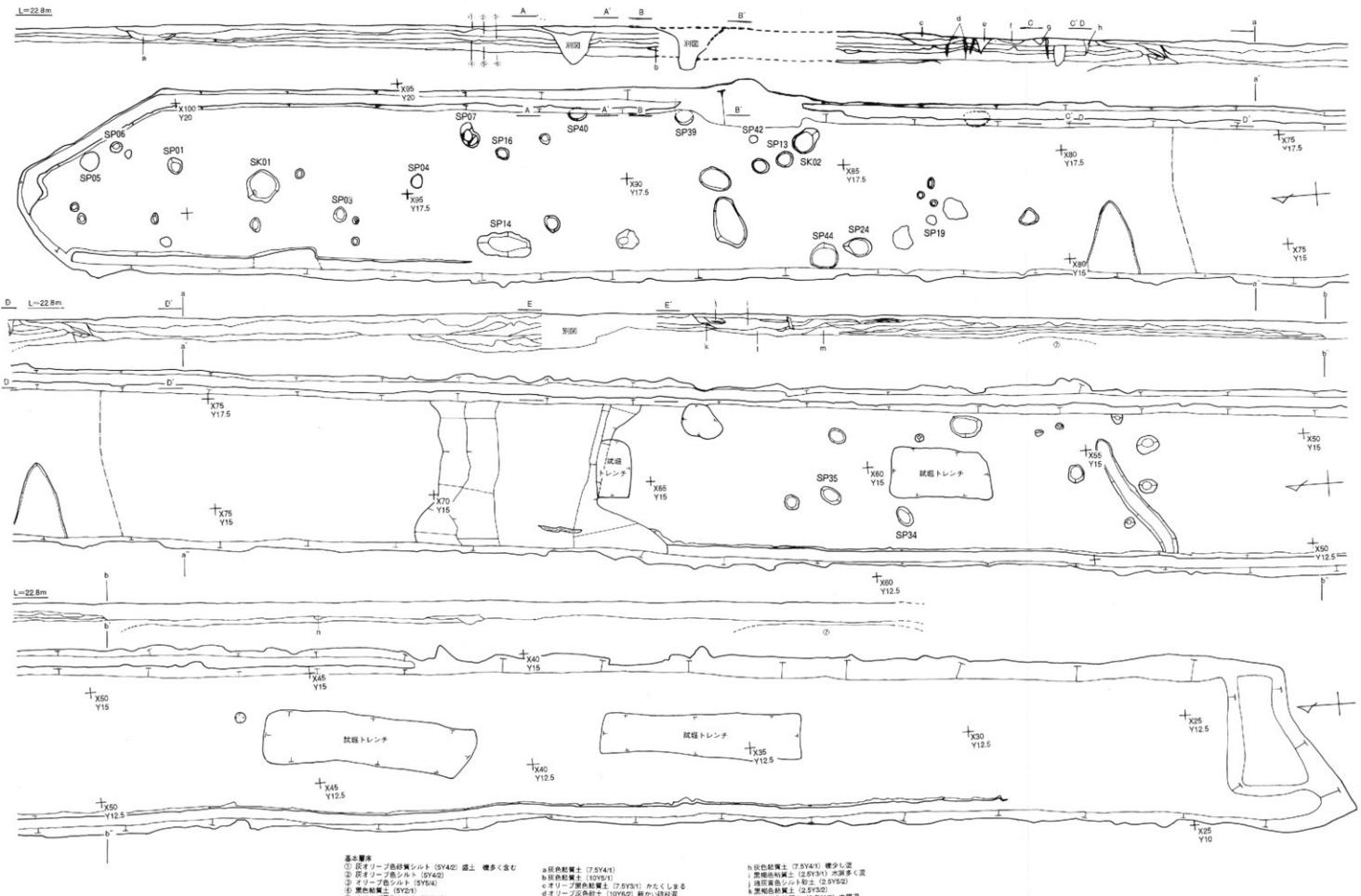
柱穴は計4つ検出した。このうちSP 53は柱根を残していた。柱根の大きさは直径が30cm、長さが80cm以上である。面取りはしておらず、樹皮もなかったが、先端部はかなり大胆に削っている。それぞれの柱穴の大きさは、直径60cm～80cm程度の大きさを持つ楕円柱穴であるが湧水によって深さははっきりしない。D地区で試掘調査をおこなった際、SP 53付近と対応する場所で柱穴群が確認されている。そこでは面取りされた非常にしっかりした柱根が出土しており、この付近にはある程度の規模を持つ建物が存在していたと思われる。

(d) SX 01

幅が10cm程、深さは最も深いところで1.5m程の溝状の遺構である。ここでは、東側の掘方に沿って直径10cmにも満たない杭列が確認された。また、杭と杭の間には直径5mm程の小枝が渡されていた。この杭列はさらに北と南の調査区外へと延びているようであった。遺物は、完成品5枚を含む中世土師器と木製品が多く出土した。このSX 01は、D地区で掘跡とされた遺構と対応する場所に位置しており掘跡の可能性をもついている。また、杭列の上層には、直径20cm程の木の内側に溝をつくり、くりぬいた部分をフタで覆った木管が南から調査区内へ延びてきていた。類例として、福井県武生市で農業用水跡として使用されていた江戸時代中期の木製水跡が出土している。



第4図 A地区遺構断面図 (掘部分1/20、ピット1/40)

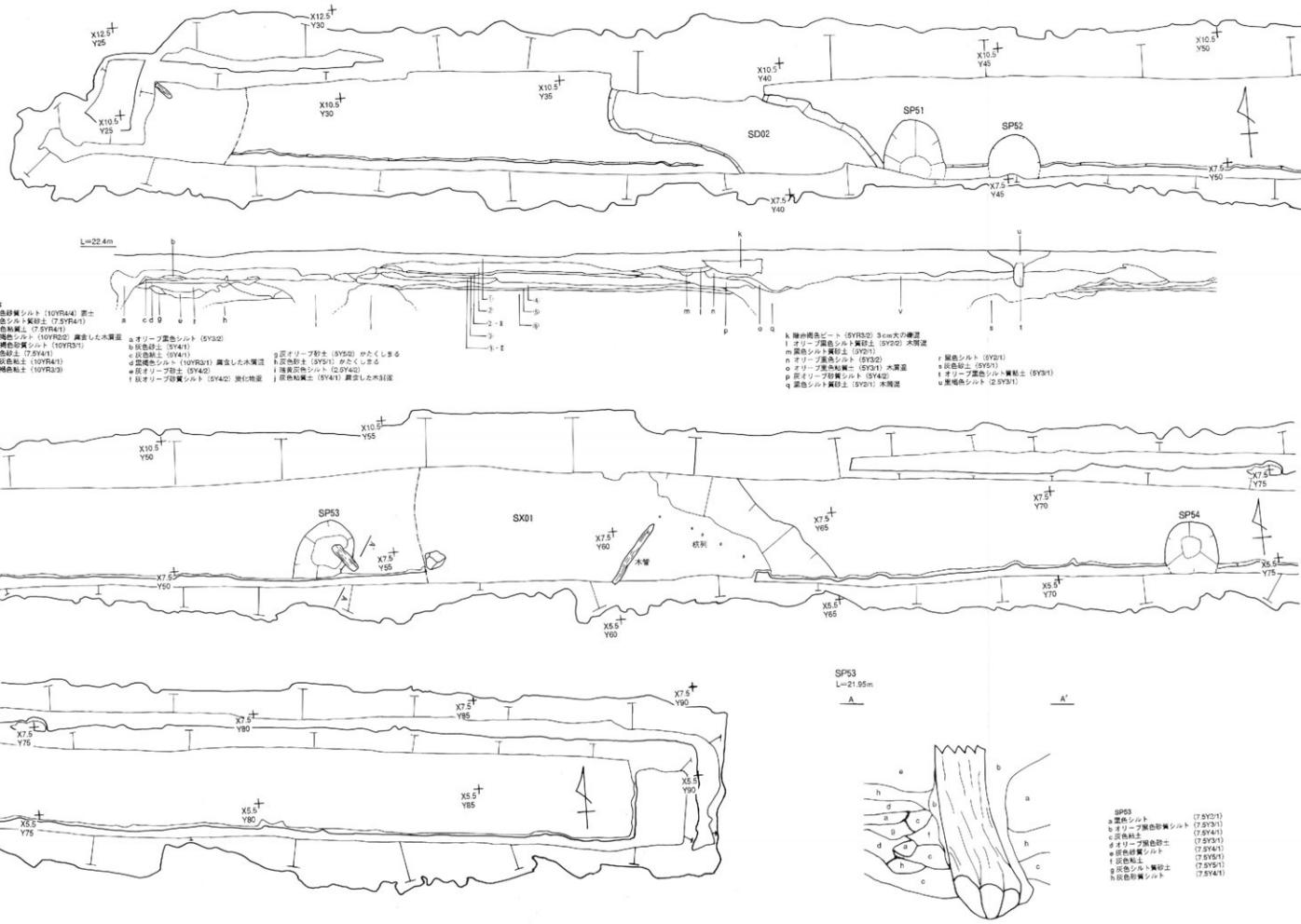


第5図 A地区地質図 (1/80)

基本層序
 ① オリーブ色粘土シルト (SY4/0) 盛土 偶々含む
 ② オリーブ色シルト (SY4/1)
 ③ オリーブ色シルト (SY4/2)
 ④ オリーブ色粘土シルト (SY4/3)
 ⑤ オリーブ色粘土シルト (SY4/1)
 ⑥ 黄オリーブ色砂土 (SY4/1)
 ⑦ 黄オリーブ色粘土 (SY4/3)

a 黄色粘土 (SY4/1)
 b 黄色粘土 (SY4/1)
 c オリーブ色粘土シルト (SY5/1) かたくしまる
 d オリーブ色粘土 (SY6/2) 緩かくほり混在
 e 黄色粘土 (SY6/2)
 f 黄色粘土 (SY6/2)
 g 黄褐色粘土 (SY6/2)
 h オリーブ色シルト (SY5/1)
 i 黄褐色粘土 (SY6/2) + オリーブ色粘土 (SY5/1)
 j オリーブ色シルト (SY5/1)

k 黄褐色粘土 (SY5/1) 軽少し密
 l 黄褐色粘土 (SY5/1) 大量多く混
 m 黄褐色シルト (SY5/2)
 n 黄褐色シルト (SY5/2)
 o 黄褐色シルト (SY5/2)
 p 黄褐色粘土 (SY4/2) 木炭混
 q 黄褐色粘土 (SY4/2)
 r 黄褐色粘土 (SY4/2) 木炭と炭化物混
 s 黄褐色粘土 (SY4/2)



第6図 B地区遺構図 (1/80)

3 遺物

今回の調査で出土した遺物は、須恵器、中世土師器、珠洲、越前、瀬戸・美濃、越中瀬戸、輸入陶磁器、鉄製品（和銛・鉄滓・錢貨）、石製品（砥石・石臼・五輪塔）、木製品（漆器碗・下駄・折敷・曲物）などがある。遺物の年代は古代、中世、近世の広い時期にわたるが、大半のものは中世の15世紀～16世紀代に収めることができる。中世以外の時期では、古代の遺物が2割程度を占め近世のものになると数えるほどしか出土していない。また、木製品の遺存状況は良好で数多く出土している。しかしながら土器、木製品とともに遺構からの出土はほとんどなく、包含層からの出土が多い。

(1) 古代

1～3・8は須恵器杯蓋である。1は頂部に明確な棱線をもち、外面はヘラケズリで内面は回転ナデを施し、かえりをもつもので7世紀後半のもの。2は外面にヘラケズリをもち、硯に転用されている。8世紀中頃のものである。3は外面に回転ヘラケズリ、内面に回転ナデを施し、鋭いかえりをもつタイプで7世紀中頃のものである。8は口縁端部が下方へ引き出されて断面三角形を呈するもので、8世紀前半に位置付けられる。4・5・7は須恵器杯身である。4は器壁が薄く、内外面にナデを施している。5は口縁端部がやや外反気味に引き出されている。7は行台杯で、内面に回転ナデが施され、高台が外側に向く形である。4・5は8世紀後半から9世紀前半のものである。6は須恵器壺類の11縁で胎土は非常に緻密で1mm大の石粒とクロウンモを多く含む。

10～12は上師器甕である。10は上部がやや外反している。調製は横方向のハケメが内外面に施されている。7世紀後半から8世紀のもの。11は焼成が甘く表面は著しく磨滅している。12の口縁端部はつまみ上げられていて、外面はロクロナデ、内面は横方向くのナデを施している。11、12はともに面取りしており8世紀代のものである。

(2) 中世

13～78は中世土師器で、13～37が極小タイプ、38～58が小タイプ、59～74が中タイプ、75～78が大タイプとなる。これらはすべて非ロクロ成形で1段ナデのものである。色調は、にぶい黄橙色・浅黄・灰黄色の3種に分けることができる。特に明示していないものは15世紀後半から16世紀代のものである。分類は口縁部が残っているものを対象にして、口径をもとに4タイプにわけた後、口縁の形状とナデの幅によって分類した。口径による分類は、10.2cm以下のものを極小タイプ、10.6cm～12cmのものを小タイプ、13cm～15cmのものを中タイプ、これ以上のものを大タイプとした。これに面取りの有無、つまみ上げの有無と口縁外面のナデの幅が広いか狭いかが分類の基準なっている。以下の分類のうちA-b-1類は出土していない。

A-a-1類 口縁端部を面取りしてつまみ上げているもので、ナデの幅が広いものである。

A-a-2類 口縁端部を面取りしてつまみ上げているもので、ナデの幅が狭いものである。

A-b-1類 口縁端部が面取りされているがつまみ上げがなく、ナデの幅が広いものである。

A-b-2類 口縁端部が面取りされているがつまみ上げがなく、ナデの幅が狭いものである。

B-a-1類 口縁端部は面取りされていないがつまみ上げがあるもので、ナデの幅が広いものである。

B-a-2類 口縁端部は面取りされていないがつまみ上げがあるもので、ナデの幅が狭いものである。

B-b-1類 口縁端部は面取りされておらずつまみ上げもないもので、ナデの幅が広いものである。

B-b-2類 口縁端部は面取りされておらずつまみ上げもないもので、ナデの幅が狭いものである。

極小タイプ 13はA-a-1類である。底部と内面の大半に煤が付着している。外面に指頭圧痕が残り、内面はナデを施し外に旗で抜いていない。14～16はA-a-2類である。15・16は内面全体に1mmを単位とする格子状の布の

圧痕がみられ、この上から横方向のナデを施しており、同様のものは他にいくつも見られる。松本氏は外底面に残る布目痕について、調整の際、手に持った布の上に土器を置いて口縁部をナデるため、外底面に残ると指摘されている。しかし、今回確認したものは内面に布目痕がついており、その上からナデを施している。このことから、布目痕は調整時についたものではなく、成形時に布製の内型を使用したかあるいは内型に布を張り合わせたものを使用したことによってついた可能性がある。17・18はA-b-2類である。18は右回りに外へ撫で抜いている。色調は他のものよりも白っぽく灰オリーブ色である。19~25はB-a-1類である。煤は19・22~25に付着している。また、布目痕は23~25にみられる。21は焼成が甘く焼き歪がひどいが、ナデの痕跡は明瞭で右回りに外へ撫で抜いている。19・20の外面には指頭圧痕が残る。26~31はB-a-2類である。26は外面に指頭圧痕が残る。27の底部には薬と思われる幅3mm程の条痕が残る。煤は28と30に付着している。28は煤が1部分にしか付着しておらず、灯明皿として使用されたのは1回だけと思われる。28は右回りに外へ撫で抜き、30は外へ撫で抜かないタイプである。30は内面に稜線がはっきりと1段つくほど口縁端部のつまみが強い。32は表面の磨滅がしてナデの幅がみえないためB-aの1類と2類の区別はつかない。33~35はB-b-1類である。33はいわゆる「ヘルメット型」と呼ばれる深手のものである。34は底部が平底に近く、他のものに比べて器高が低い。15世紀前半のものである。35は内面の一部に煤痕があり、見込み付近に赤色顔料が付着している。

小タイプ 38はA-a-1類である。39はA-a-2類である。焼成は甘く底部にはひび割れが目立つ。煤は口縁端部にのみ付着している。40・41はA-b-2類である。40・41ともに、右回りに外へ撫で抜いている。40は1カ所ある灯心の痕跡が明瞭に残っており、内壁面に布目痕がある。外面には指頭圧痕があり、油がこぼれた跡も観察できる。41は3カ所の灯心痕跡があり、底部にも直径3cm程の煤が付着している。42~46はB-a-1類である。46はいわゆるヘソ皿ではないが、底部にわずかなへこみがあり見込み部分が隆起している。47~50はB-a-2類である。47~49は内面に布目痕をもち49・50は煤が付着している。47は外面に指頭圧痕がある。52は口縁のほぼ全周に煤が付着しており、ナデの幅が識別できず、B-a-1類か2類か区別できない。51・53~57はB-b-1類である。54と55は煤が付着している。58はB-b-2類である。内面は剥離が激しくナデは識別できない。

中タイプ 59~61はA-a-1類である。59の口縁端部と60の内壁面に煤が付着している。60は外面に指頭圧痕がある。60は12世紀後半のもので口縁の外面に稜線をもつタイプである。62はA-a-2類である。63~66はB-a-1類である。63・65は煤が付着し、65は内面に布目痕がある。66は、片方の断面が黒く変色している。67~73はB-b-1類である。68は2カ所に灯心痕跡がある。煤は67・68・69・70・72・73に付着し、特に67は全体が黒く変色している。71はB-a-1類である。74は立ち上がり部分に内側から直径3mm程の穿穴を3ヶ所開いている。この穴に紐を通して、何かに吊して使用したものと思われる。内外面ともに使用による2次焼成のため剥離が激しいが、本来の焼成は良かったものと思われる。また、ナデは外に撫で抜かないタイプである。

大タイプ 75~77はB-a-1類である。75は煤が付着している。76は外面だけ煤が付着している。78はB-b-1類である。焼成はやや甘く内面は磨滅している。

79は白磁碗である。釉はやや灰色がかった白色で、施釉は腹部外側の中間で止められている。内底面近くに沈線が巡っており、高台は低く厚いタイプで高台内部の削り込みはわずかである。太宰府分類の「IV類」にあたるもので、12世紀のものとなる。また、図示しなかったが15世紀代の細蓮弁文の青磁碗と16世紀代の菱花皿が出土している。

9と80は珠洲で9は鉢の口縁部で吉岡編年のⅡ期にあたる。80は壺の肩部分で焼成は甘い。

81は土師質のスリ鉢で鉢口は幅2.2cmの原本で8条を1単位とし、底部から口縁部に向かって挿き上げる。口縁端部はやや開き気味で口縁下に幅7mm程の沈線を巡らす。16世紀のものである。

82は越前の甕の口縁部である。口縁の形成は方頭を呈し、口縁内面に幅5mm程の沈線をつけ、口縁外部の稜はなめらかである。内外面ともに横ナデが施されている。16世紀中頃のものである。

83~90は瀬戸美濃で、大室末期のものである。84・88は皿類で84は黄色がかった灰釉がかかり、88は淡緑色の灰釉が内外面にかかる。84は胴部中央が丸みを帯び、口縁が外反する端反皿で16世紀前~中のものである。88は16世紀中頃のものである。83・85~87・89・90は天日茶碗である。口縁の形状は胴部が屈曲しS字口縁をもつタイプである。これらは鉄軸が施されており、口縁部だけが残り軸止めの位置がわからない85を除くと、すべて胴部で軸止めされている。89・90は削り出し高台で、90は漆雜ぎがされている。83・86は15世紀末~16世紀前半、87・90が16世紀前半、84・85が16世紀前半~中頃、88・90が16世紀代のものとなる。

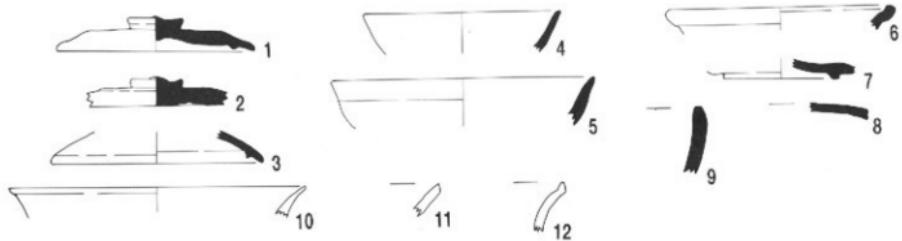
91・92は越中瀬戸である。90は胴部下で丸みをもち口縁部にかけて直線的に立ち上がる丸碗で、鋸軸が施されている。92は胴部中央で丸みをもって立ち上がる丸皿で、高台内まで鉄軸がかかる。とともに越中瀬戸の操業が開始される16世紀末に位置付けられる。

93~101は漆器で、93・94・98は杯形態で胴部が緩いカーブを描く。93は外面に赤色漆で草木文を描き、内面は漆が厚く付着していて見込みの文様は判断できない。漆の容器であった可能性がある。94は漆の剥離が激しく赤色漆の文様はほとんど剥げ落ちている。93・94は黒色漆地に赤色漆で文様を描くもので、98は外面が黒色漆で内面が赤色漆塗りされている。95~97・99~101は楕形態である。95~97は高台と器高が低く胴部から口縁にかけて開き気味に立ち上がるもので、すべて黒色漆地に赤色漆で文様を描いている。95は内面に鶴丸文を三つ描く。外面は赤色漆による文様が描かれているようだが漆が剥離していて判読できない。高台裏に「+」字の線刻がある。96は内面に草木文が描かれている。外面は口縁から高台近くまで漆が剥離しているが、わずかに草木文と思われる文様が読み取れる。高台裏に「U」字の線刻がみられる。97は見込みに文様を描く。外面の漆は著しく剥離している。99・100は胴部が垂直に近い立上がりをもつものである。100は高台と器高が高く、高台裏だけ黒色漆塗りで残りの部分は赤色漆を塗るものである。101は高台が低く胴部の立ち上がりは緩やかだが口縁付近の立ち上がりが垂直になるタイプである。

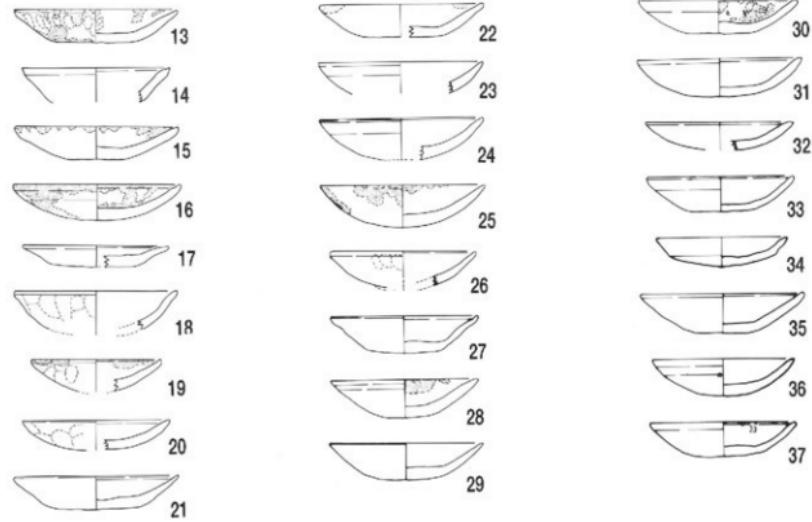
102は連齒下駄である。前臺周辺に使用による指圧痕があり右足用であることがわかる。台裏の後臺付近には製形によるノミ痕がある。103は柄杓で曲物を身にしている。104は長さが43cm、幅が3.5cm、厚さが5mmの木筒である。墨書きがみられるが判読できない。105は折敷の底板である。外周縁に2穴を1組とする直径2mmの小孔が2組開けられている。また、両面に無数の線状痕があることからまな板に転用されたものと考えられる。この他、建築部材、箸等も出土している。

106~110は銅鏡である。合計5枚出土した。このうち貨名が識別できるのは106の「熙寧通寶」(1068年初鋤) 107の「元豐通寶」(1078年初鋤) 109の「政和通寶」(1111年初鋤) の3枚すべて北宋時代のものである。111は鉄滓で112は和銘である。和銘は片側が欠損している。

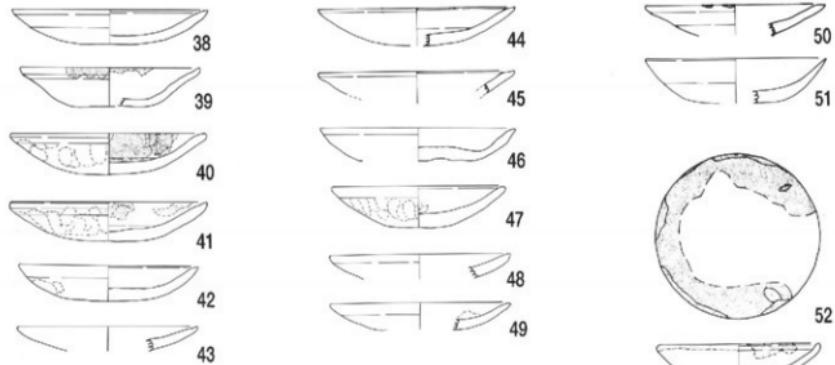
113は石臼でSP44で出土した。石材の種類は凝灰角礫岩で2cm大の礫を非常に多く含む。挽き木を側面に2カ所ある長方形の穴に差し込む横打込み式で、目のパターンは8分割されている。114は五輪塔の火輪である。頂部が地面へ垂直に突きささるようにして埋まっていた。石材は凝灰岩で、形態は軒四隅の稜線が底部へ向かうにつれて内側に入る。水輪との接地面である底部裏には3cm程の半月状の窪みがある。115は磁石である。石材の種類は泥岩である。表面はなめらかで擦痕は両面にみられる。



極小タイプ

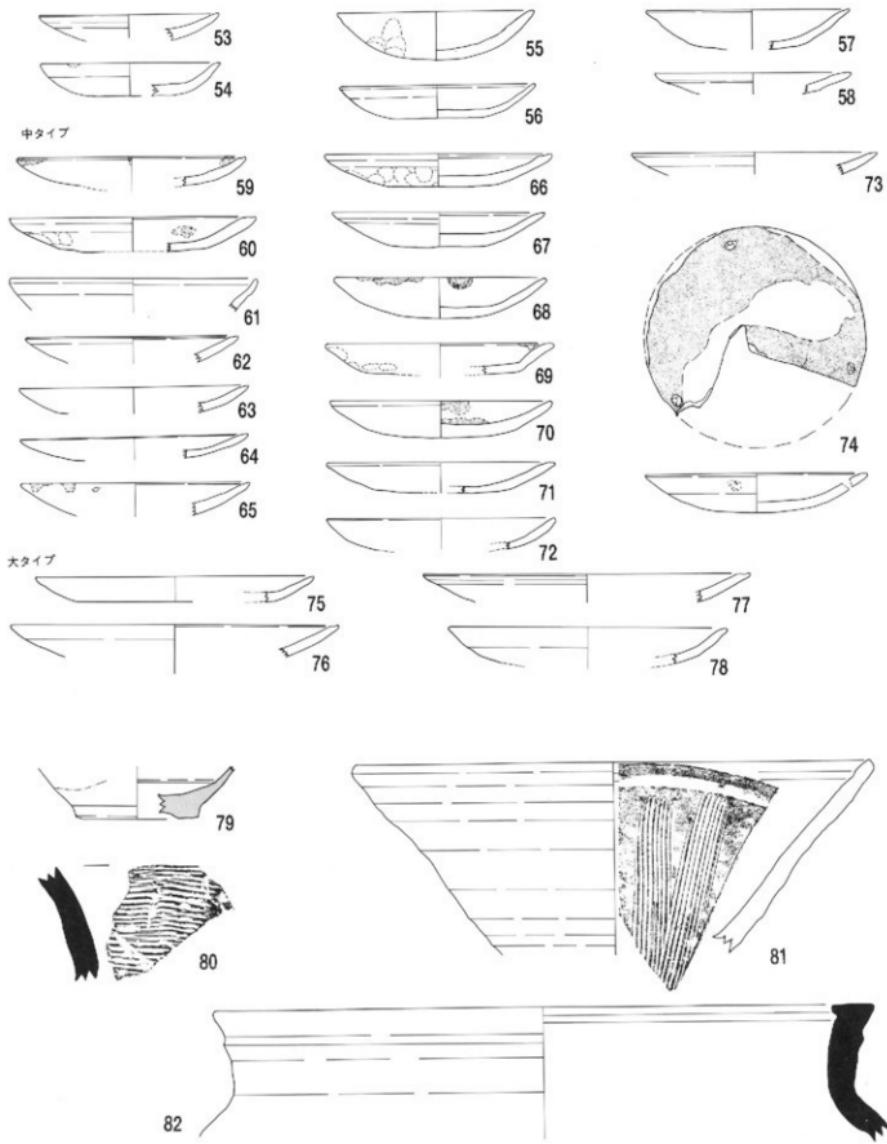


小タイプ



焼付部部分

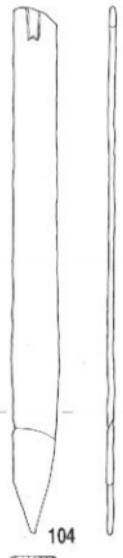
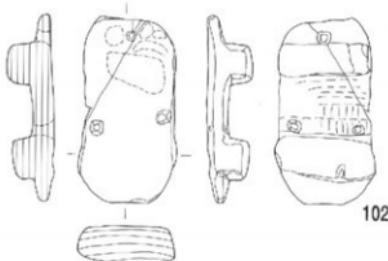
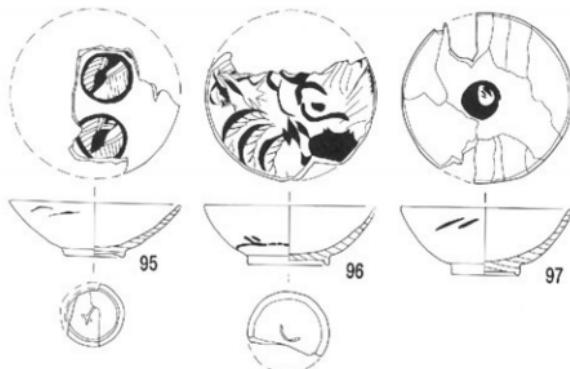
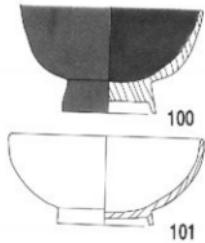
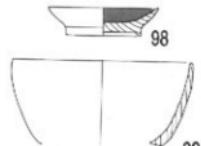
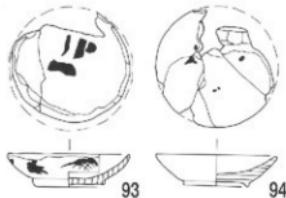
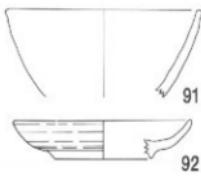
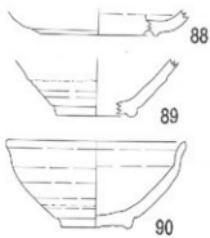
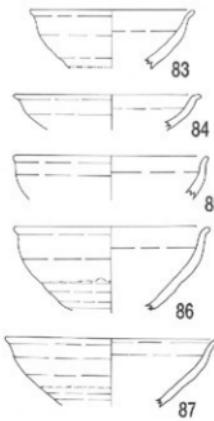
0 1 : 3 15 cm



■ 煤付箇部分

0 1 : 3 15 cm

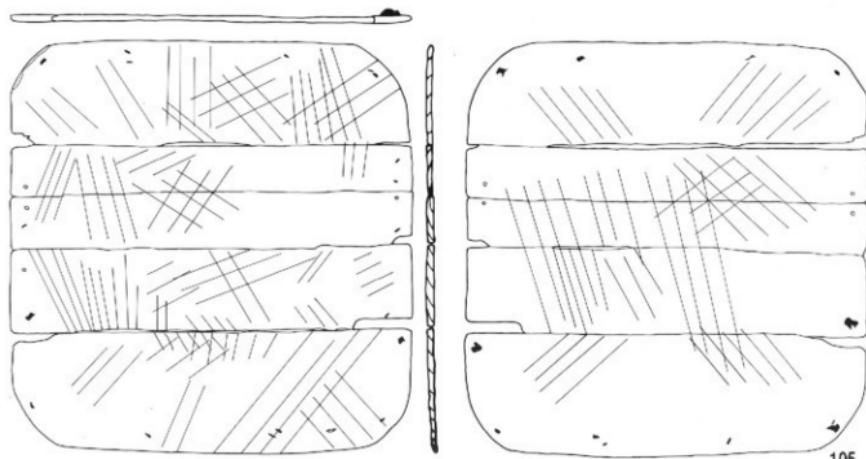
第8図 出土遺物実測図 (1/3)



0 1 : 3 15 cm

赤色塗り

第9図 出土遺物実測図 (土器類1/3、木製品1/4)



105



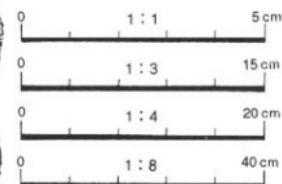
106

107

108

109

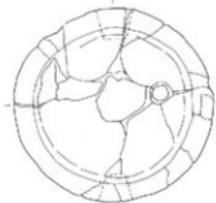
110



111



112



113



114



115

第10図 出土遺物実測図（古銭1/1、木製品1/4、石製品1/8）

IV まとめ

1 中世の出土遺物

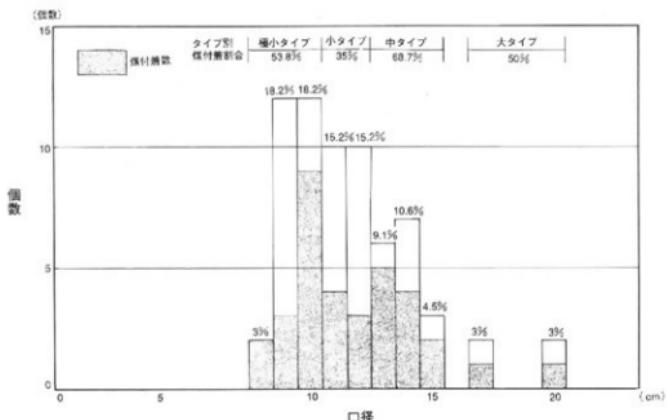
今回の調査における出土遺物の大半は中世（15世紀後半～16世紀）に位置付けられるものである。よって、土器を中心として中世出土遺物について考察をおこないまとめてみたい。なお、対象とする土器は固体識別法によって数量化をおこなったが、調査面積が狭く數量不足な面があることから小破片もカウントの対象としたことを断っておく。

(1) 土器の組成

第11図は、中世出土遺物の土器組成を表したものである。最も多いのは中世土師器で、全体の6割以上を占めている。この中世土師器の比率に注目し、富山県内における中世の城館と集落の出土遺物の組成比率と調査地の比率を比べてみた。まず城館遺跡では、遺物の中心年代が15世紀末を主とする井口城¹¹と16世紀末を主とする安田城¹²は、9割以上を中世土師器が占め、16世紀末を主とする白鳥城跡¹³では7割以上、15世紀後半～16世紀を主とする壇ノ城跡¹⁴では6割以上となっている。一方、集落遺跡では、13世紀後半から14世紀を中心とする江上B遺跡は中世土師器の比率が約4割¹⁵であり、14世紀後半から15世紀を中心とする早月上野遺跡は出土遺物が9割以上を珠洲が占め、中世土師器はほんの僅かとなっている。城館遺跡では食膳具と土師器の比率が高くなり、一般集落では珠洲を中心とした貯蔵・調理具の比率が高くなることが指摘されており、当調査地は前者に属するものである。越前・珠洲についてもう少し詳しくみてみると、珠洲より越前のほうが多いことに気がつく。のことから、木舟城の中心年代が吉岡編年で珠洲の変容・衰退期とされるV期以降あることがわかる。これらの土器の他では、瀬戸美濃の比率が13.5%と比較的高い割合



第11図 出土土器の組成（中世）



第12図 中世土師器分類表 ■各グラフ上の数字は全個数に占める%を表わす。

を占め、その半数以上が天目茶碗であるという点が注目される。遺跡の中心年代が木舟城と同時にあたる越前朝倉氏の本拠地、一乗谷の器種構成を参考にすると調査地は館・寺院・武家屋敷地区と同等の比率を持っている。陶磁器を機能によって大きく3つの分野にわけた小野正敏氏の分類によると、天目茶碗は「茶花香の道具のように付加的な機能」をもつ付加分野に含まれることになる。これらは「接客のためのハレの空間」とされる会所で茶の湯・花・香・連歌を催した際、実用あるいは観賞としての役割を担っていたもので、この付加分野の比率は階層性を示す指標の一つとされている。こうした上器組成によって、調査地は木舟城内かもしくはそれに極めて近い場所であったことが裏付けられたといえる。

(2) 中世土師器

第12図は口径を横軸に、個数を縦軸にとったもので、さらに各口径における煤・タール・油煙の付着割合を表したものである。このグラフから、極小タイプ内の9~10cmと小タイプとした11~12cmに個数のピークがあり、実に全個数の7割近くが極小タイプと小タイプに集まっていることになる。また、かなり大きいものといえる口径20cmのものが出土している。富山県内の中世城館における中世土師器の法量をみてみると、口径が8~10cm、11~12cm、13~14cm、15~17cmの4種類を主として、例外的に大きい20cm以上のものを加えて計5種類にわかれれる傾向を持つ。この傾向と比べると、今回出土したものも同様の傾向を持つことが確認でき、大タイプに含めた口径20cmのものは例外的に大きいタイプに入ることになる。口径20cm以上のものについては遺跡の「特別な性格を反映している可能性が高い」ことが指摘されている。

ところで、煤の付着しているものを見てみると、中タイプが70%近い比率を占めているのに対し、小タイプが35%と低い比率である点が注目される。また各口径別でみてみると、極小タイプ内の10cm、中タイプ内の13~15cmが高い比率を占めていることがわかる。9cm・11~12cmが低い比率であることを考慮すると8cmのものは絶対数の不足から高い比率になったと考えられる。以上のことから中世土師器の使用状況を考えると、一般的に口径10cm及び13~15cmのものは灯明具として使用される傾向が強いといえる。

2 木舟城について

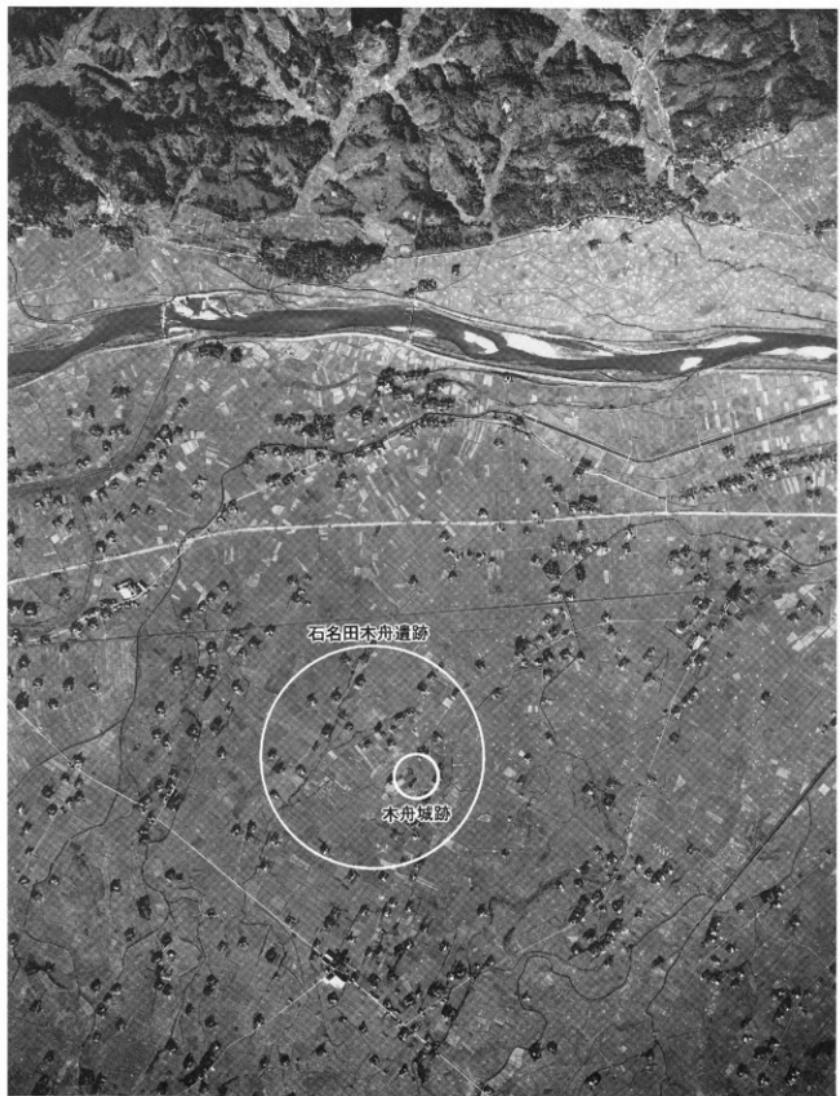
木舟型は石黒太郎光弘によって1184年に築城されたと言われている。石黒氏は16世紀の中頃までここを居城としていたようである。石黒氏は当初上杉謙信と敵対していたが、謙信が越中を平定すると、その配下となり、謙信が死去すると今度は織田信長の配下となった。そのため、1581年に城は上杉方に攻め落とされてしまい、織田信長は石黒氏を呼び出し道中で暗殺した。その後、織田方が城を攻め落とし、佐々成政がこの城を支配下においた。織田信長が死去すると、豊臣秀吉が越中を平定し、前田家がこの城を支配下に置くこととなった。1585年には城主に任命された前田秀忠が入城したが、翌年1月に天正地震が起こった。この地震によって城主をはじめとする大勢の人間が「一丈ばかり掘り沈め」(三重間記)られて城は壊滅状態となった。同年5月まで城を使用していたことが文献の上で明らかとなっているが、この5月以後城モは小矢部市の今石動城へと移ってしまい、木舟周辺は田畠へと姿を変えることとなってしまった。

現在、木舟城跡は県指定史跡になっていて、小高い丘をわずかに残しているだけである。この城の具体的な規模に関する記録を追っていくと、18世紀まで遡ることができる。1764年に記された『越中古城記』には木舟城は三つの郭と三重の堀をもっていたと記されており、1799年に記された『加越能三州志』では、城地の大半が田畠で木丸跡と呼ぶところは僅かに24、25間であると記されている。近年、地籍図をもとにした木舟城の想定図が林寺氏によって作成

されおり、氏は複郭式の城を想定している。また、木舟城の環境整備を目的として平成8年に発足した木舟城跡調査検討委員会による文献調査よって、1818年（推定）に記された3つの郭とこれを囲む1重の堀をもつ木舟城の絵図面が存在していることがわかり、この図面をもとにした想定図も作成されている。どちらの想定図も3つの郭をもち、これを囲む堀が存在するという、点で一致している。今回検出した縄跡は想定図によると、最も北側の堀にあたる。また、想定図をもとにしたレーダー探査もおこなわれており城の西側の堀と考えられる溝状の落ち込みが確認されている。

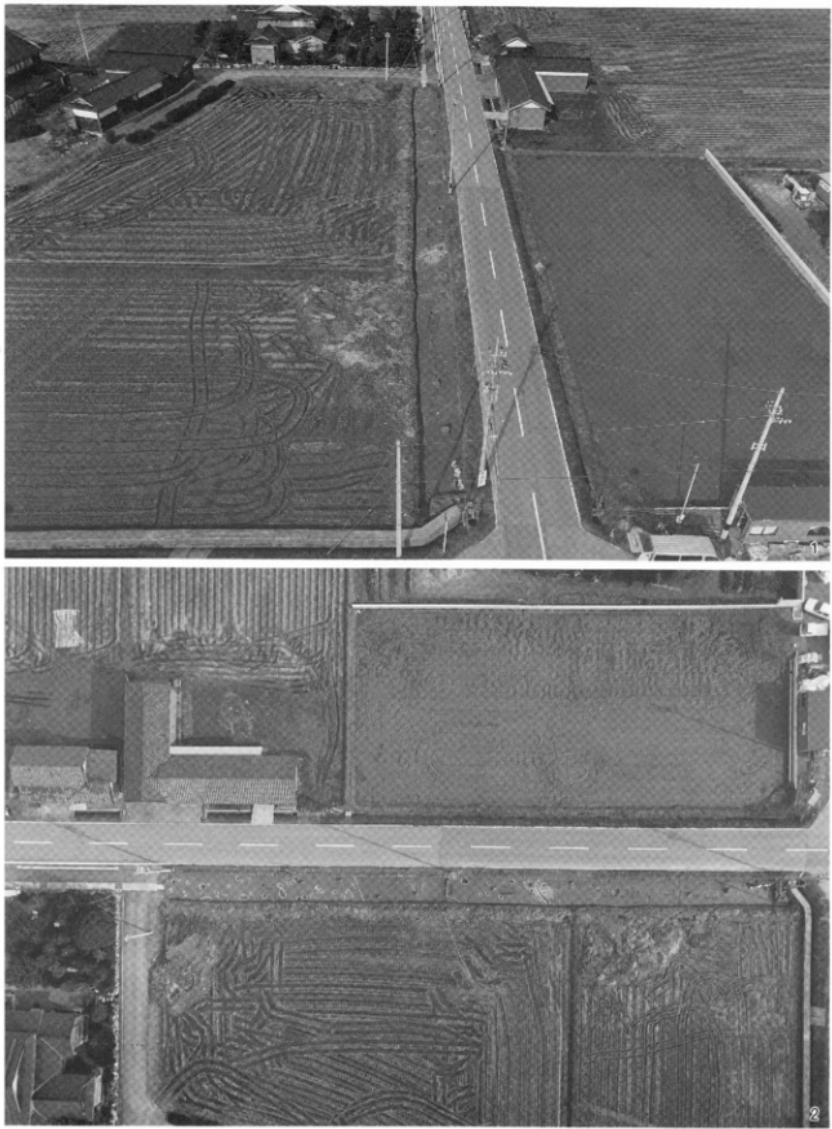
引用・参考文献

- | | | |
|------------------|------------|---|
| (1) 富山県文化振興財団 | 1995 | 『埋蔵文化財年報（6）』 |
| (2) 福岡町教育委員会 | 1995 | 『石名田木舟遺跡発掘調査報告書』 |
| (3) ジャパン通信情報センター | 1997 | 『月間文化財発掘出土情報』 177号 |
| (4) 松本建速 | 1994 | 「手づくねかわらけからみた個の解釈」『財団法人岩手県文化振興事業財團埋蔵文化財センター紀要XIV』 |
| (5) 山本信夫 | 1988 | 「北宋期貿易陶磁器の編年—太宰府出土例を中心として—」『貿易陶磁研究』No.8 |
| (6) 吉岡康暢 | 1989 | 『珠洲の名陶』 珠洲焼資料館 |
| (7) 井口村教育委員会 | 1990 | 『井口城跡発掘調査概要』 |
| (8) 富山県教育委員会 | 1979 | 『富山県ほ場整備関連事業埋蔵文化財発掘調査概要—安田城跡—』 |
| (9) 富山市教育委員会 | 1981 83~84 | 『白鳥城発掘調査概要 I - III』 |
| (10) 北陸中世土器研究会 | 1991 | 『城館遺跡出土の七器陶磁器』 |
| (11) 北陸中世土器研究会 | 1992 | 『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』 |
| (12) 北陸中世土器研究会 | 1991 | 『城館遺跡出土の七器陶磁器』 |
| (13) 北陸中世土器研究会 | 1992 | 『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』 |
| (14) 小野正敏 | 1991 | 「城館出土の陶磁器が表現するもの」『中世と城と考古学』新人物往来社 |
| (15) 小野正敏 | 1991 | 「城館出土の陶磁器が表現するもの」『中世と城と考古学』新人物往来社 |
| (16) 北陸中世土器研究会 | 1991 | 『城館遺跡出土の土器陶磁器』 |
| (17) 林寺嚴州 | 1993 | 「福岡町木舟城跡採集遺物の紹介」『大境 15号』 |



図版1

1958年(昭和33年)当時の石名田木舟遺跡



図版2

1 A地区全景(南から) 2 同(上から)



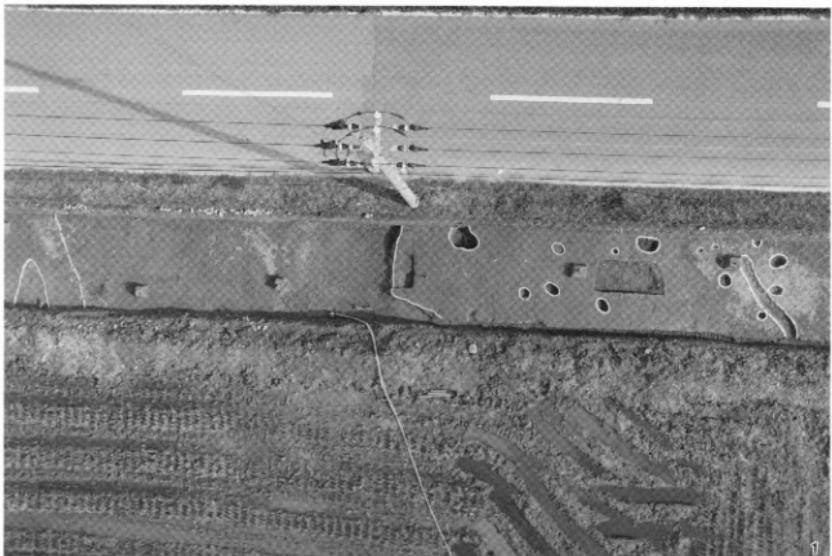
1



2

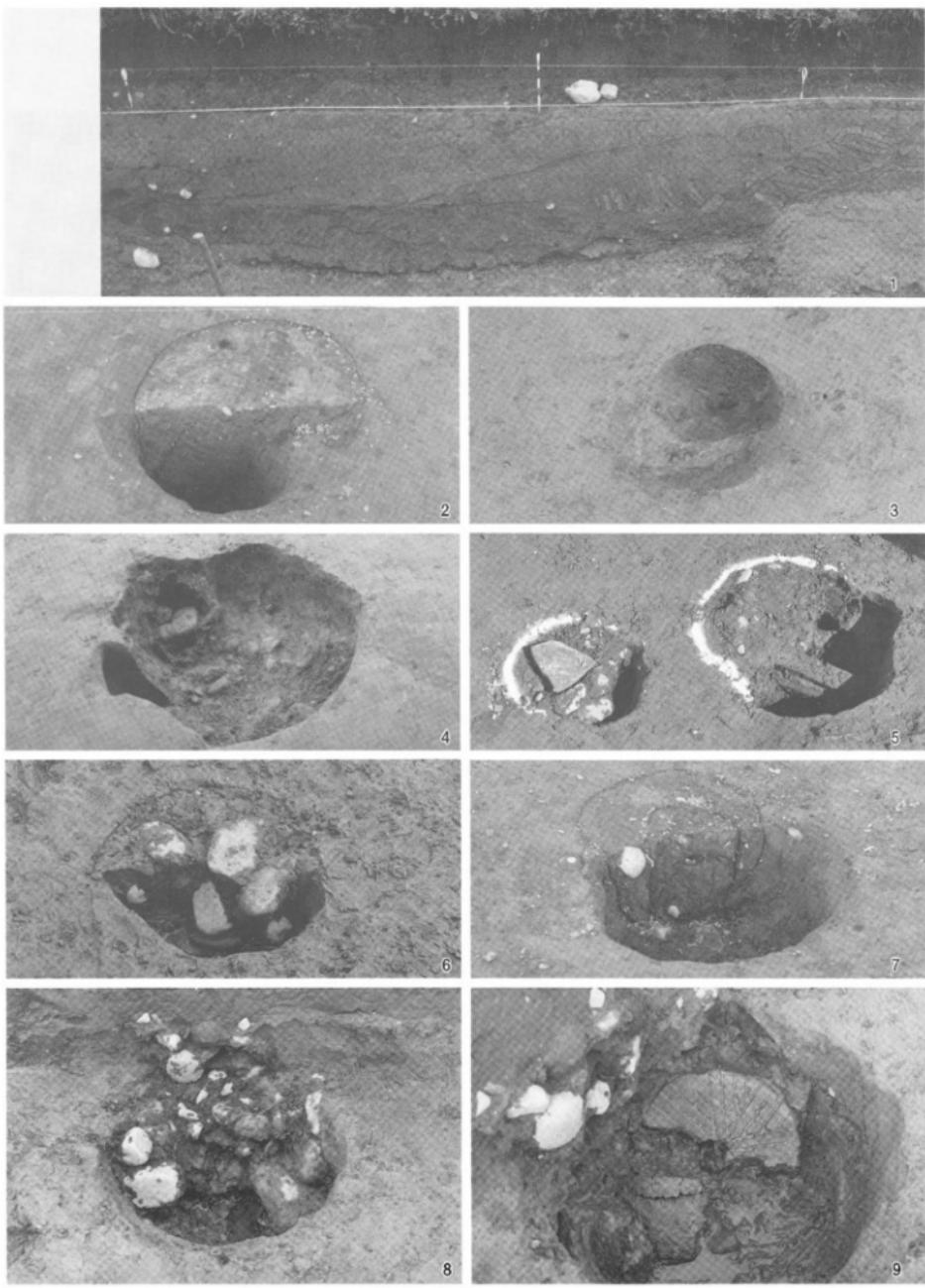
図版3

1 A地区北部ブロック（上から） 2 同（西から）



図版4

1 A地区堤跡（上から） 2 同（西から）



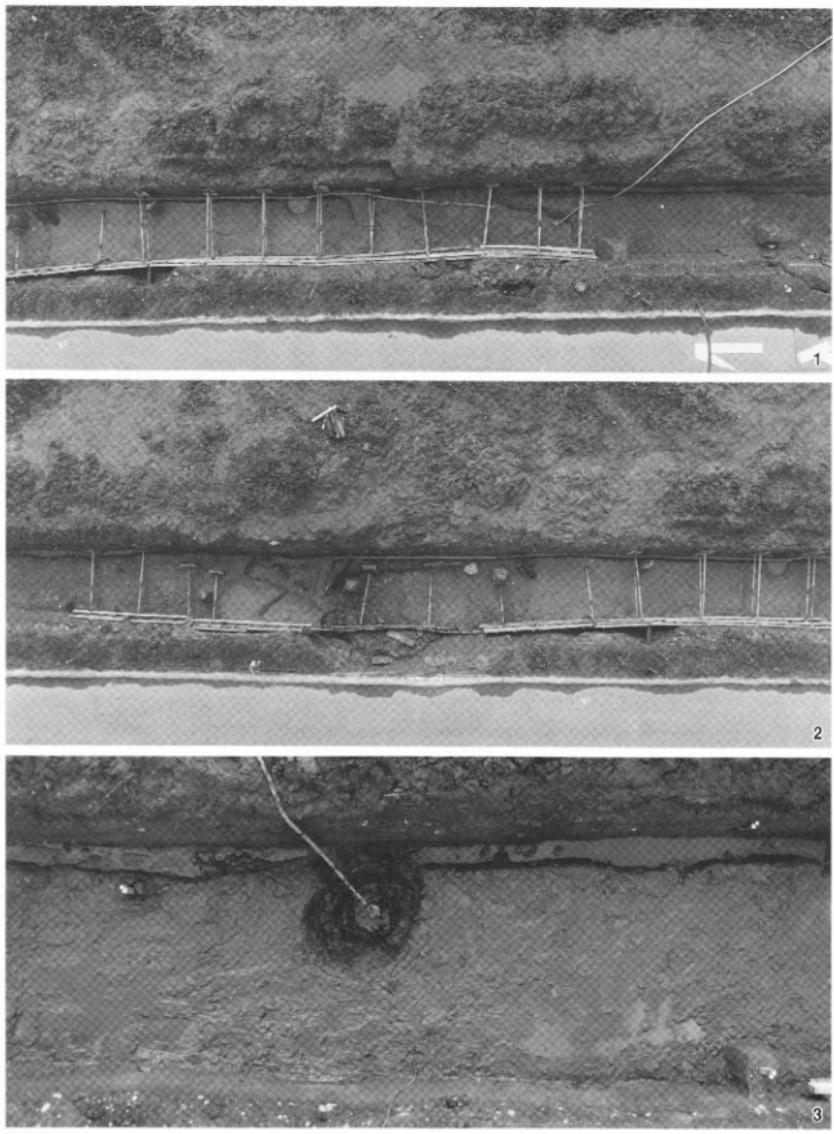
図版5 A地区の遺構

1 脇南端部断面(西から) 2,3 SP01(南から) 4 SK01(南から) 5 SK02(西から) 6 SP13(北から)
7 SP16(南から) 8,9 SP44(東から)



図版6

1 B地区全景(東から) 2 同(上から)



図版7

1 SD02 (上から) 2 SX01 (上から) 3 SP54 (上から)



図版8 B地区の遺構

1 噴砂(南から) 2 地壁のズレ(北から) 3 SX01の杭列(東から) 4 SX01の木筒(西から)
5 SX01の杭列(西から) 6 SP53の柱模(西から) 7~9 遺物出土状況



28

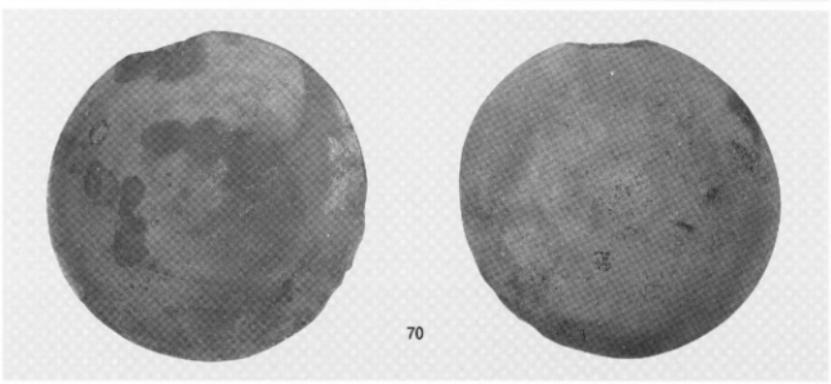
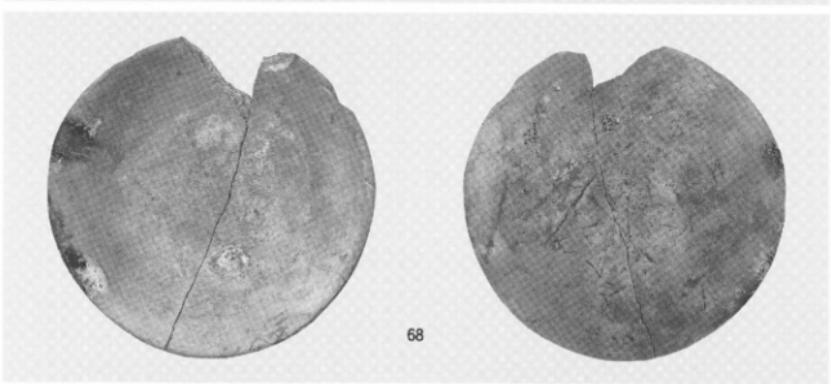
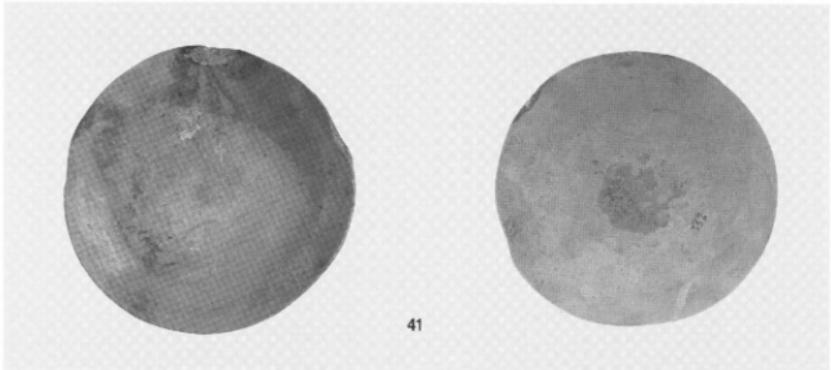


30

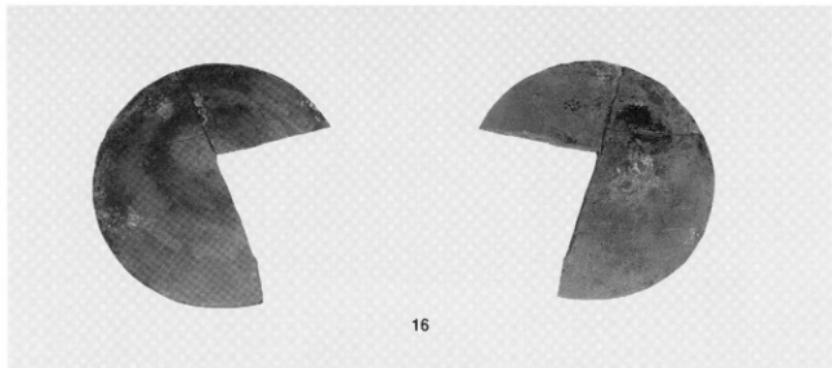


52

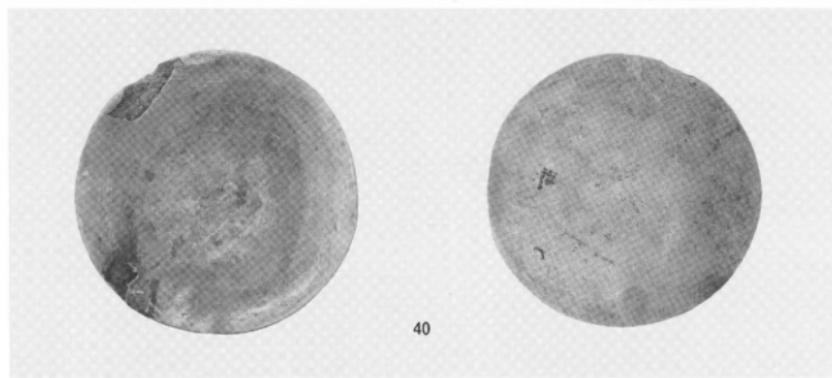




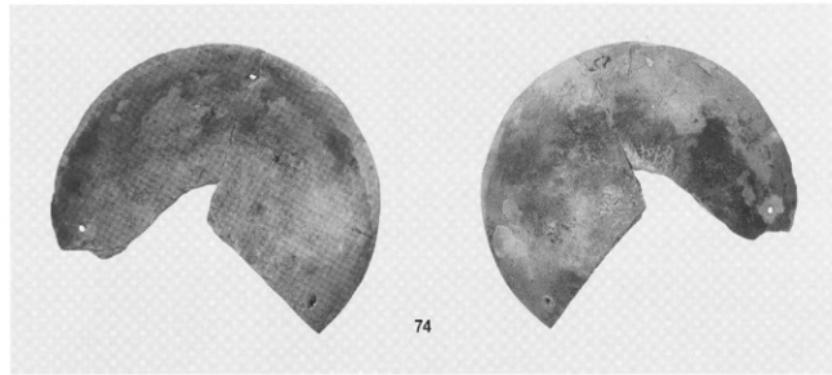
图版 10
出土遗物



16

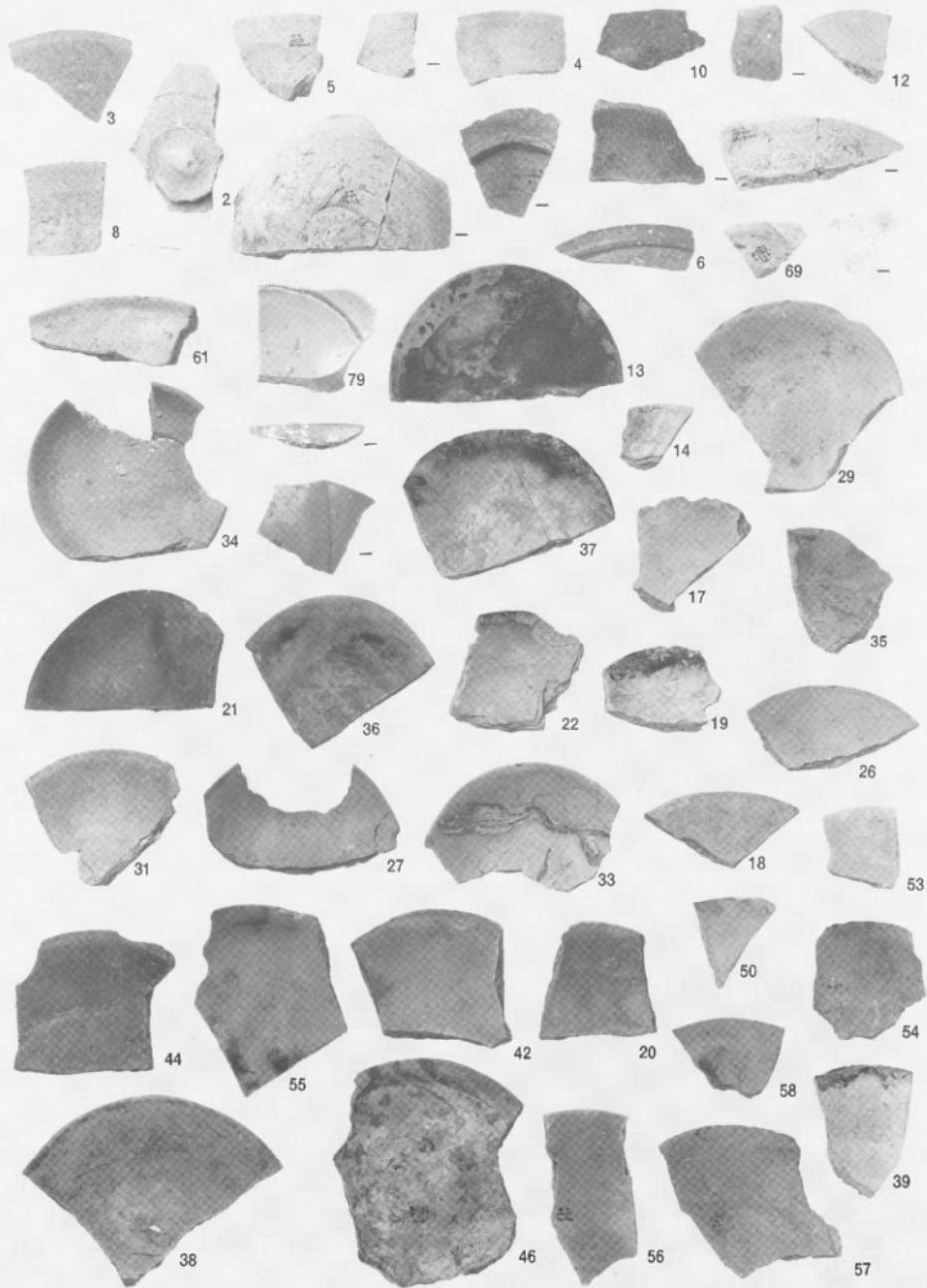


40

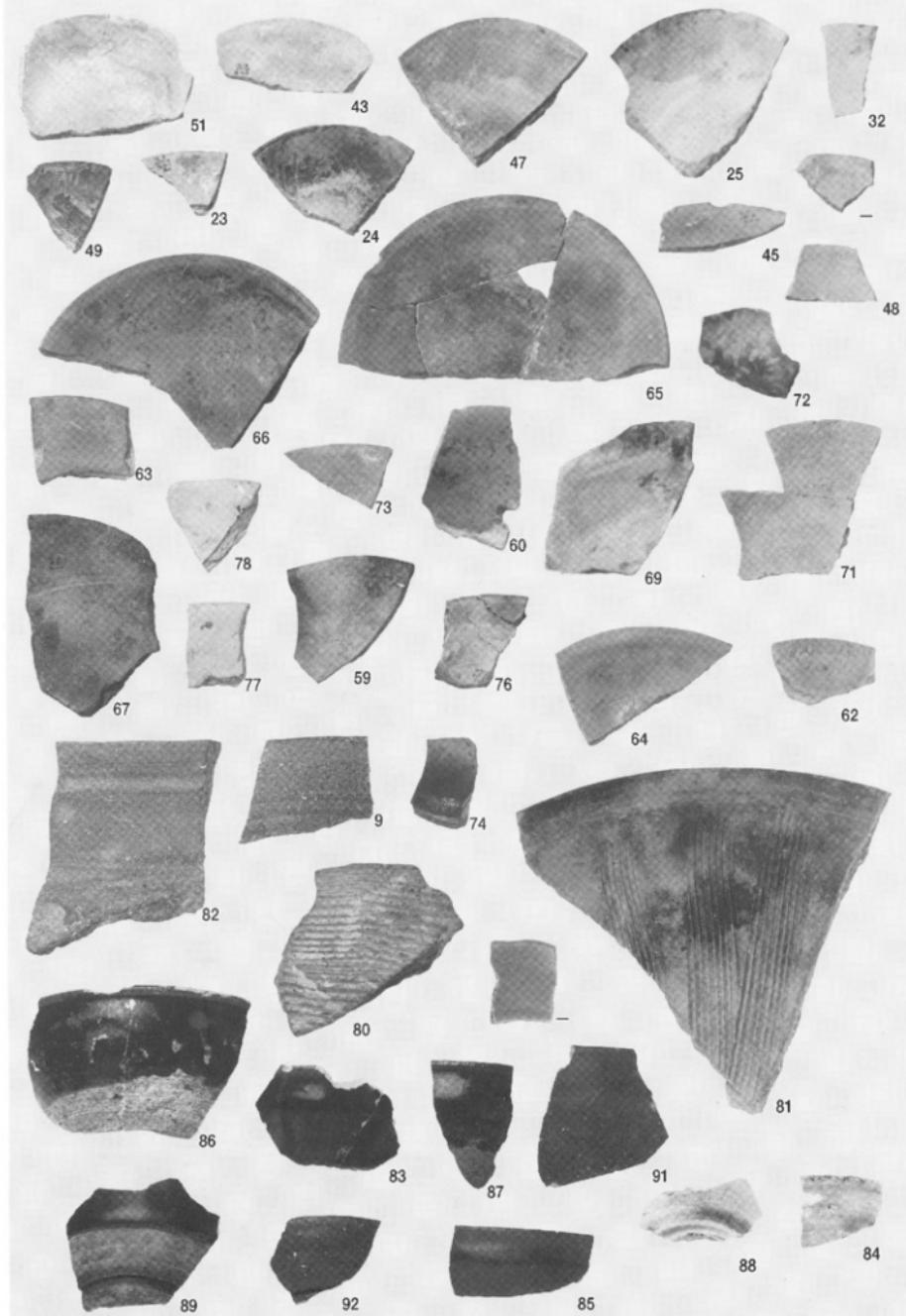


74

图版 11
出土遗物



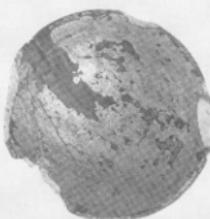
圖版12
出土遺物



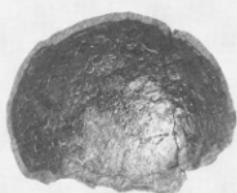
图版13
出土遗物



95



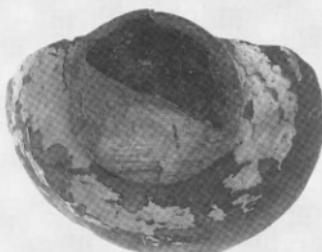
98



96



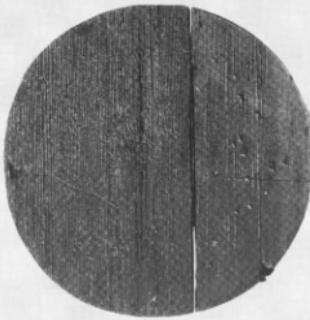
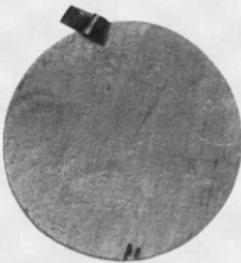
100





图版15
出土遗物

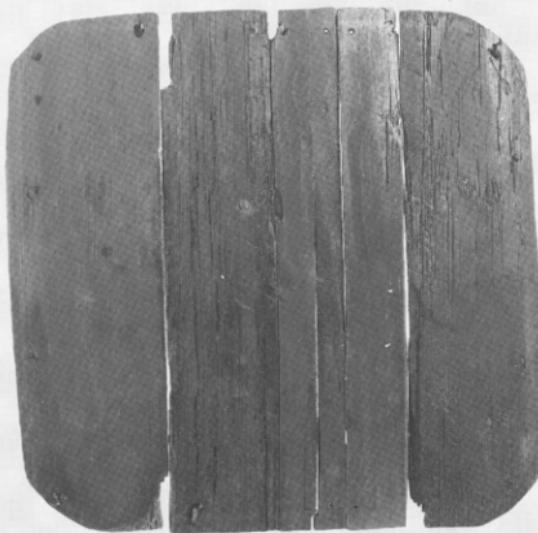
102



103



104



105



112



106



107



108



109



110



114



113

報告書抄録

ふりがな	とやまけん ふくおかまち いしなだきふねいせき はっくつちょうさほうこくしょ							
書名	富山県福岡町石名田木舟遺跡発掘調査報告書 一県指定史跡木舟城跡隣接地一							
シリーズ名 番号	福岡町埋蔵文化財調査報告書第6冊							
編集者名	栗山雅夫 越前慶祐							
編集機関	福岡町教育委員会							
所在地	〒939-01 富山県西砺波郡福岡町福岡12番地 TEL 0766-64-5333							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
石名田 木舟遺跡	富山県西砺波郡 福岡町木舟	16224	422080	36° 41' 20"	137° 53' 53"	1996年 9月24日～ 11月29日	A地区 240m ² B地区 210m ²	町道大滝正得線 歩道設置工事 (A地区) 及び 町道矢部石名田線 道路改良工事 (B地区)
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物				特記事項
石名田 木舟遺跡	集落 城跡	中世	堀・溝・土坑・ ピット	須恵器、土師器、中世土師器、青磁、 白磁、珠洲、越前、瀬戸・美濃、伊 万里、砥石、古錢、木製品、鉄滓				木舟城の堀跡を 検出

平成9年3月31日発行

富山県福岡町 石名田木舟遺跡発掘調査報告書

編集 福岡町教育委員会

発行 福岡町教育委員会

富山県西砺波郡福岡町 大滝12

印刷 日興印刷株式会社